

日中女性の就業意識比較**

川久保 美智子

1 はじめに

日本と中国は共通点もあるが違うことの方が多い。まったく違う社会システムの国だから違うのは当然であるがその昔日本は中国から色々なことを学んだ。だが今は中国に技術援助などを行っている。漢字も同じ漢字を使うが最近の中国の漢字は簡略化しすぎて元の漢字がわからないようなものまである。中国4千年の歴史と文化を持った大国と海に囲まれた小さな島国、その文化も生活習慣も違う国に生まれ育った人間を比較してみることは大変興味をそそることである。全然違う国でも何らかの共通点もある場合もあるがほとんどの場合には違ひの方が多いものである。日本と中国の女性はどのような共通点を持ち、どのような違いがあるのだろうか。前回の調査では男女を対象として日本と中国で同じ調査をして比較をした。その結果中国では男女の差がほとんどみられなかったが日本では男女の差が大きい事が判明した。したがって、今回の調査は日本と中国の女性だけを対象にして比較してみることにした。

2 調査方法

日本での調査は1994年10月から始め12月までに終了した***。産業と企業規模の2段階サンプリングにより日本の企業38社で働く女性に合計

1,009票の調査票を配布し752人から有効な調査票が回収された(回収率74.53%)。中国での調査は1995年1月から2月までに実施された。500票の調査票のうち449票の有効調査票が回収された(回収率89.8%)。日本と中国において同じ内容のアンケートを実施したが、項目によっては中国に当てはまらないものもあったので中国の現状に合わせて修正した箇所もある。日本語の調査票を中国語へ翻訳しそれをまた日本語に逆翻訳し翻訳の正確さを確認した。日本での調査結果はSPSSのプログラムを使用し分析結果をまとめて発表した****。中国での調査結果は筆者が1995年3月中国を訪問してフロッピーを受取り帰国してからSPSSのプログラムを使用し分析した。その結果もすでに発表した*****。ここでは日本と中国のデータを使用し比較分析を試みる。比較は5項目においてなされた。1. 個人属性、2. 仕事の内容、3. 家事分担、4. 満足感、5. ライフ・コースである。

3 調査結果

(1) 個人属性

まず最初にこの調査に協力してくれた日中女性の個人属性を紹介する。

1) 年齢

日中女性の年齢分布は表1の通りである。平均

*キーワード：就業意識、女性就業者、日中比較

**本論文は1995年8-9月中国北京で開催された第4回世界女性大会と11月北京で開催された第6回アジア社会学会でも発表した。

***この調査は1994-95年度文部省科学研究助成金一般研究(C)の援助を得て実施したものである。

****川久保美智子「日本女性のライフ・コース —理想と現実—」関西学院大学社会学部紀要、1995年10月、73号：51-66参照。

*****川久保美智子「中国女性の就業意識」関西学院大学社会学部紀要、1996年3月、74号：95-110ページを参照。

年齢は日本人26.9歳、中国人36.2歳で日本人の方が9.3歳若い。日本女性の勤務年数は短いので若い女性が労働市場に多いのは当然の現象である。この調査のサンプルも20から24才の若い女性が45%を占めている。一方、中国の女性は定年まで働くので平均年齢は当然高くなる。40から49才の女性が約30%を占めている。

表1 日中女性の年齢分布(%)

	日本	中国
20歳未満	2.4	2.2
20-24歳	45.2	14.3
25-29歳	33.6	6.9
30-34歳	6.3	18.7
35-39歳	3.2	20.5
40-49歳	5.2	29.6
50-59歳	3.3	7.1
60歳以上	0.0	0.2
DK	0.8	0.5
合計	100.0	100.0

2) 住居形態

日本では住宅は個人所有が認められているのでほとんどの国民は自宅または賃貸の住宅に住んでいる。または、会社が社員に対して单身寮や家族のための社宅を用意する場合も多い。この調査では55.1%が土地付き持ち家に住んでいる。中国では個人所有の住宅はほとんどないので国が企業の提供してくれる住宅に住んでいる。この調査でも68.4%が寮・社宅である。これは国の政策の違いを反映している結果である。中国でも最近個人

表2 住居形態(%)

	日本	中国
土地付き持ち家	55.1	9.8
マンション	16.8	0.9
借家	5.6	4.9
寮・社宅	5.1	68.4
公団・公営	7.8	7.1
アパート	5.9	1.1
その他	3.1	6.5
DK	0.6	1.3
合計	100.0	100.0

表3 日中女性の結婚歴(%)

	日本	中国
未婚	79.9	17.1
既婚	17.8	77.7
離婚	0.8	0.9
死別	0.9	0.2
別居	0.0	0.2
DK	0.6	3.9
合計	100.0	100.0

が住宅を所有することを奨励しているので将来は個人所有の住宅に住む人々が増加するだろう。

3) 結婚歴

日本女性の場合には約80%が未婚であり、中国人の場合はその反対に約80%が既婚である。これは平均年齢が日本の場合26.9歳と低く、中国人の場合36.2歳と高いので当然である。1990年の中国の調査によると中国都市部の女性の初婚年齢は22.77歳でこれは政府の23歳という晩婚の要求のためである。また、学歴が高くなるにつれて初婚年齢が遅れる傾向がある。しかし、農村では初婚年齢は都市部の女性より低い。全体的には16-30歳の間に98.2%の女性が結婚している¹⁾。

4) 同居家族員数

日中の同居家族は何人くらいであろうか。平均は日本2.5人、中国2.2人である。中国では1982年より人口問題解決策として1人っ子政策を採っている。

すなわち、1. 晩婚=法廷婚姻年齢、男性22歳、女性20歳、より3年以上遅らせる。2. 晩産=女子は24歳を過ぎて出産する。3. 少生=少なく生む、都市は1人、ただし、1984年の緩和後農村は2人、少数民族自治地域の少数民族は都市2人、農村3人。4. 稀=出産間隔を3-4年あける。を実施している²⁾。したがって、家族は夫婦と子供1人の3人ということになる。しかし、1人っ子政策が採択される以前に生まれた子供は2人またはそれ以上の家庭が多い。

日本の場合には单身女性が多いので両親との同居

1) 中国婦女社会地位調査課題組『中国の女性』監訳者山下威士、山下泰子、中国婦女出版社、1995年、pp. 255-256。

2) 平田幹郎『最新中国データブック』古今書院、1996年、p. 31。

が多い。日本でも1人っ子が増加しているが兄弟姉妹と同居している者が約半分の46.8%いる。中国では1人っ子が多いので兄弟との同居は少ない。中国の1990年の調査によると中国女性が希望している子供の数は1人っ子政策にもかかわらず2人が49.0%を占めている。1人っ子を希望しているのはたったの8.2%である。しかし、都市部の女性は20.3%が一人っ子を希望している。農村の女性は平均2.69人を希望している³⁾。中国女性の総出産率は1990年には2.32であったが、都市部の女性が実際に出産した子供の数は1人っ子が38.5%、2人が21.5%でそれ以上が25.7%である⁴⁾。同居者から家族構成を比較すると表5の通りである。日中共に核家族が最も多いが日本の場合には未婚者が多いので独身の子供と両親との核家族であるが、中国の場合には既婚者が多いので配偶者と子供との核家族が多い。日本で次に多いのは直系家族である。これは祖父母との3世代同

居家族である。中国の場合には単身家族の方が直系家族より多い。

5) 子供の成長段階

日本では子供がいる女性は752人中70人(9.03%)、中国人は449人中323人(70.19%)いる。これらの女性達の子供の成長段階を質問してみた。

日本女性の場合にはもうすでに子供が社会人の場合が最も多く28.5%を占める。中国人の場合はばらついていて幼児から社会人までいる。このうち乳幼児のいる女性は母親が働いている間誰が面倒をみているのかを質問してみた。日本人は「親」が最も多いが中国人は「その他」である。「その他」とは日本にはほとんどない企業内保育所のことである。日本には企業内保育所はほとんどないので回答選択肢のなかに含まれていなかったので

表4 日中女性の同居者(%)

	日本	中国
一人暮らし	10.4	8.7
配偶者	17.3	76.8
母親	71.9	15.1
父親	62.8	12.2
祖父	2.5	0.7
祖母	9.0	1.1
子供	9.4	82.0
兄弟姉妹	46.8	8.2
その他	3.0	5.5
平均	2.5人	2.2人

(*複数回答)

表5 日中女性の家族構成(%)

	日本	中国
単身	10.4	8.7
既婚核家族	13.8	71.3
未婚核家族	58.4	6.5
直系家族	14.0	8.2
その他	3.4	5.3
合計	100.0	100.0

(*複数回答)

表6 日中女性の子供の成長段階(%)

	日本	中国
乳児	11.4	2.8
幼児	14.3	20.4
小学低学年	8.5	20.0
小学高学年	15.7	17.3
中学生	18.5	18.3
高校生	18.6	11.7
大学生	15.7	10.8
社会人	28.5	9.6

(*裸複数回答)

表7 幼児の世話を誰が見るか(%)

	日本	中国
公立保育園	11.4	3.4
私立保育園	12.9	1.2
託児所	1.4	19.8
親	15.7	19.8
家政婦	0.0	0.3
近所の人	0.0	0.3
ベビーシッター	0.0	4.0
その他	5.7	40.6
DK	52.9	10.6
合計	100.0	100.0

3) 中国婦女社会地位調査課題組『中国の女性』監訳者山下威士、山下泰子、中国婦女出版社、1995年、pp. 261-262)。

4) 同 p. 283。

ある。中国の女性は出産後も働き続けるので企業の中に保育所が設置されているのである。日本では保育所の数が足りないので親が面倒をみてくれる場合には仕事を継続することができるがそれ以外には運良く保育園などに子供を預けることができる女性以外は仕事を辞めて育児のために家庭に入らなければならないのである。

6) 最終学歴

日本女性の場合には高卒が37%と最も多い。次に短大と4年生大学卒を合計すると51.3%で約半分を占める。中国女性の場合には41.8%である。高卒は20%で日本より少ないが日本では2.5%しかいない中卒が13.8%を占める。また大学院まで行った女性は中国の方が多く11.1%を占める。

日本では高校への進学率は平成6年において女性は96.8%であり、男性が94.6%で女性の方が高い⁵⁾。また、女性の大学進学率も男性より高く平成6年度には45.9%である（大学21.0%、短期大学24.9%）。男性の進学率は40.9%である（大学38.9%、短期大学2.0%）。これは平成元年からの傾向である。しかし、女性は短期大学への進学が多いので大学生に占める割合は31.3%であり、短期大学に占める割合は91.8%である。大学院に占める女性の割合は20.3%であり、そのうち修士課程の女性の割合は20.9%、博士課程の割合は18.6%である⁶⁾。大学への進学率は男性と比較して高いが大学院への進学率は女性の方が低い。

表8 日中女性の最終学歴(%)

	日本	中国
中学校	2.5	13.8
高等学校	37.0	20.0
専門学校	7.6	9.8
短期大学	27.1	14.9
4年制大学	24.2	26.9
大学院	0.8	11.1
その他	0.3	1.1
DK	0.5	2.4
合計	100.0	100.0

中国での小学校への入学率は98.4%で、中学への進学率は86.6%であり、高校への進学率は44.1%である。更に大学への進学率は4.64%である⁷⁾。大学生のうち女子学生は33.6%で約3分の1である⁸⁾。

(2) 仕事の内容

1) 職種

日本女性の場合66.6%が事務職であり、専門技術職は18.0%である。中国女性の場合には専門技術職が29.4%と最も多く次がサービスの27.2%である。日本女性の場合ほとんどの女性が短期間で退職するので仕事の内容は男性の補助的なものが多いのである。一方、中国の女性は男性と同じように定年まで働くので仕事も補助的なものではなく専門的なものが多いのである。

表9 日中女性の職種(%)

	日本	中国
専門技術職	18.0	29.4
管理職	1.6	13.4
事務職	66.6	5.6
販売営業	4.1	3.1
生産工程技能	4.0	7.1
サービス	2.0	27.2
その他	2.7	10.9
DK	1.0	3.3
合計	100.0	100.0

2) 就業形態

日本女性の場合にはほとんどが正社員であり、中国女性の場合にはほとんどが国有企業の社員である。中国には日本の場合のような出向社員や派遣社員、パート・タイマーなどの制度がないので質問を中国向けに変更した。国有企業とはその字の通り国が所有する企業である。国営企業と呼ばれていたが所有と経営を分離して現在では国有企業と呼ばれるようになった。集体企業とは町や区などが経営する公営の企業である。合資企業とは2つまたはそれ以上の企業が資本金を出し合って経営する企業である。これは公営の場合も私営の

5) 総理府編『女性の現状と施策』大蔵省印刷局、1994年、p. 62。

6) 同 p. 65。

7) 平田幹郎『最新中国データブック』古今書院、1996年、p. 194。

8) 同 p. 199。

表10 日中女性の就業形態(%)

日 本		中 国	
正社員	95.5	国有企業	78.6
出向社員	0.3	集体企業	5.3
派遣社員	0.1	合資企業	0.7
パートタイマー	2.4	私管企業	0.2
臨時雇い	0.1	个体戸	1.1
契約登録社員	0.7	臨時	1.3
その他	0.5	合同工	6.0
DK	0.4	その他	3.3
		DK	3.5
合 計	100.0		100.0

場合もある。また、外国の企業との合資企業も含まれる。私管企業とは個人経営の企業である。个体戸とは小規模な個人の商店などである。合同工とは契約社員のようなものである。この下の身分が臨時雇いであり、この上が正社員である。国有企業に勤務する78.6%の女性達はもちろん全員正社員である。

3) 業種

日本女性は製造業が最も多く次が卸小売業である。中国女性はサービス業が3分の1を占め次が公務の26.7%である。製造業は10.9%である。日本女性は公務はほとんどいない。公務というのは日本の場合公務員のことであるがこの調査のサンプルには一般企業に勤務する女性だけが含まれているので公務員はいない。中国の場合公務というのは国のために働く場合の事を指す。したがっ

表11 日中女性の業種(%)

	日 本	中 国
建設業	2.9	3.3
製造業	58.5	10.9
卸・小売業	10.8	0.2
金融保険不動産業	0.7	4.5
運輸通信業	2.9	3.8
電気ガス熱供給業	0.5	0.0
サービス業	8.1	33.0
公務	0.3	26.7
その他	15.3	17.6
合 計	100.0	100.0

て、国有企業で働く女性達もこの中に含まれているのでこのように多いのであろう。中国は総人口の約半分の50.8%が就業している。そのうちの約半分の56.4%が第一次産業に、約4分の1の22.4%が第2次産業に、そして残りの21.4%が第3次産業に従事している⁹⁾。しかし、この調査のサンプルには第1次産業は含まれていないで第3次産業がほとんどである。

4) 女性の管理職

日本女性で役職に就いているのは5.9%だけであるが、中国女性は23.8%と約4倍の女性が役職に就いている。労働省の1994年版「賃金構造基本統計調査」によると管理職に占める女性の割合は3.9%である。職位別に見ると部長1.4%、課長2.6%、係長6.4%である¹⁰⁾。この全国平均と比較するとこの調査に参加した日本女性達は管理職に就いている者が多い。しかし、そのほとんどが係長クラスである。

5) 女性の管理職の有無

「女性の管理職が会社の中にいますか？」とい

表12 日中女性の役職(%)

	日 本	中 国
ついていない	92.3	61.7
ついている	5.9	23.8
DK	1.8	14.5
合 計	100.0	100.0

9) 同 p. 39.

10) 労働省『1994年版賃金構造基本統計調査』1995年。

う質問に対し、日本では女性の管理職は「いない」という回答が多く62.4%を占めるが中国ではその反対で「いる」という回答が圧倒的に多く87.5%である。日本では女性の管理職がいかに少ないかわかる。

6) 女性の管理職への昇進可能性

では女性が管理職に昇進する事はできるのだろうか。日本でも「できる」という回答の方が「できない」という回答よりも多く66.2%であるが中国では86.0%が「できる」という回答である。日本では可能性はあっても実際には女性の管理職は少ないのである。中国では可能性はもちろん、実際に女性の管理職は日本より多くいるのである。

7) 昇進希望

では、日中の女性達は役職に就きたいと思っているのであろうか。もしそうならどの程度まで昇進したいと考えているのであろうか。それともそんなことは全然考えていないのであろうか。日本女性の74.9%、中国女性の58.8%は昇進したくないと回答している。日中共に昇進したくない女性の方が多く昇進したいと考えている女性達もいる。しかし、中国女性の方が昇進したいと思っている女性が日本女性より多い。では彼女達はどの程度まで昇進したいと考えているのであろうか。日本女性は主任までが最も多く6.6%であるが、中国女性は部長までが10.2%と最も多い。次に多いのはその他であるがこれは社長であらうか。日

表13 日中女性の昇進希望(%)

	日本	中国
重役	1.5	0.9
部長	1.1	10.2
課長	3.7	4.5
係長	2.8	2.7
主任	6.6	1.6
正社員	3.6	5.1
準社員	0.0	0.4
その他	5.8	9.8
昇進したくない	74.9	58.8
合計	100.0	100.0

本では女性が高い地位まで昇進するのは男性より年数がかかるし女性の管理職が占める割合はまだ低い。女性管理職の内訳を見ると係長クラス64.8%、課長クラスが28.4%、部長クラスだと6.9%である¹¹⁾。

中国では女性も実力次第で高い地位に就くことができるので昇進したいと考える女性もいるが、日本ではそのようなことは最初から考えていない女性が多いようである。

8) 年収

日本女性の平均年収は258万円中国女性のそれは6,120元である。1月510元である。6,120元を円に換算すると約81,947円(1元=13.39円、1996年7月23日現在)であるが物価水準が日本と中国とでは全然違うので単なる数字の比較は無意味である。1994年の中国全国平均は4,510元である。し

表14 日中女性の年収(%)

日本		中国	
100万円未満	2.5	1,000元未満	8.7
100 - 199万円	20.6	1,000 - 1,999元	3.8
200 - 299万円	50.4	2,000 - 2,999元	2.9
300 - 399万円	19.0	3,000 - 3,999元	7.6
400 - 499万円	2.7	4,000 - 4,999元	11.1
500 - 699万円	2.0	5,000 - 5,999元	12.0
700 - 999万円	0.4	6,000 - 7,999元	18.9
1,000万以上	0.0	8,000 - 9,999元	22.0
DK	2.4	10,000元以上	9.6
		DK	3.4
合計	100.0		100.0

11) 日本経済新聞、1995年12月1日。

かし、地方や業種により格差があり1993年の北京では4,510元であるが商業の平均は4,483元である。また、上海の平均は5,646元であり、商業の平均は5,589元である¹²⁾。

9) 転職経験

日中共に転職経験がない者の方が圧倒的に多いが、中国女性の30.5%は転職経験があると回答している。転職経験のある者は日本人は平均1.30回である。中国人も平均1.27回である。日本女性の場合には学校を卒業して就職してまもない者が多いので転職経験者が少ないのであろう。一方、中国女性の方が転職経験者が多いのは平均年齢が高いためであらう。

中国の1990年の調査によると転職経験のない女性性は73.1%であり、1回転職経験がある者が

14.7%と最も多い。この調査の結果と比較すると転職経験がある者が多いが最近では転職も自由に行えるようになったし、中国人は職業の変更を通じて自分自身の能力が何に向いているかを発見でき、更に能力を開発し、そのことにより、積極的に向上しようとする人生態度をとるのである¹³⁾。

1989年より職業の自由選択が実施され中国人はより自分の能力を発揮できる職場を探して転職をするようになったのである。都市部の女性は農村の女生と比較して転職経験が多い。転職経験がない者が農村女性では80.2%もいるのに都市の女性では半分近くの42.4%である。2回転職した者も16.4%いる¹⁴⁾。また、1995年より労働法が施行され、人員解雇ができるようになり、労働者の移動も今後ますます増加するものと思われる¹⁵⁾。

10) 退職理由

転職経験のある女性、日本人158人、中国人137人に退職理由を3つ挙げるように質問してみた。その結果は表16の通りである。日本女性の場合には1番目の理由としては「その他」が最も多く個人的な理由で退職した者が多い。「その他」の理由とは例えば、人間関係、低賃金などである。次に

表15 日中女性の転職経験(%)

	日 本	中 国
ない	76.9	59.5
ある	21.1	30.5
DK	2.0	10.0
合 計	100.0	100.0

表16 日中女性の退職理由(%)

	日 本			中 国		
	1 番	2 番	3 番	1 番	2 番	3 番
家事全般	1.3	1.3	1.3	24.8	0.0	0.0
結婚	19.6	1.9	0.6	5.1	2.9	0.0
出産	4.4	4.4	0.0	0.7	0.0	0.7
育児	0.0	0.6	2.5	0.7	1.5	0.0
子供の教育	0.0	1.3	0.0	5.1	10.2	2.2
両親病人の世話	1.9	1.3	1.9	2.9	2.2	2.9
夫の転勤	0.6	0.6	0.0	4.4	1.5	0.7
夫の残業が多い	0.0	0.0	0.0	1.5	2.2	4.4
家族の理解協力	0.0	0.6	2.5	2.2	0.7	0.0
自分の健康や体力	10.8	10.1	3.2	3.6	5.8	4.4
職場の雰囲気	23.4	16.5	4.4	8.0	4.4	2.9
その他	28.5	4.4	6.3	22.6	4.4	6.6
DK	9.5	57.0	77.3	18.4	64.2	75.2
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

12) 平田幹郎『最新中国データブック』古今書院、1996年、p. 38。

13) 中国婦女社会地位調査課題組『中国の女性』監訳者山下威士、山下泰子、中国婦女出版社、1995年、p. 103。

14) 同 p. 105。

15) 平田幹郎『最新中国データブック』古今書院、1996年、p. 39。

表17 コース別管理制度の有無と総合職か一般職か(%)

	日本	中国		日本	中国
ある	32.8	36.7	総合職	8.5	32.3
なし	63.0	46.5	一般職	56.6	21.4
DK	4.2	16.8	DK	34.9	46.3
合計	100.0	100.0		100.0	100.0

多いのが「職場の雰囲気」で3番目が「結婚」による退職である。

中国人女性の場合には「家事全般」が最も多く、2番目が「その他」、3番目が「職場の雰囲気」である。中国の1990年の調査によると女性の退職理由で最も多いのは家庭生活の必要による別居の解消の18.0%、勤務地が遠いの20.2%と結婚・出産の8.9%である。この3つを合計すると47.1%を占める。これは仕事と家庭とを両立させるための転職である。これは女性だけにみられる転職理由で男性の場合にはこのような理由で転職はしない。2番目の理由は仕事の必要によるための転勤であり、これが45%を占める。その他の転職理由としては労働条件が悪いの13.8%、才能の発揮・趣味を生かすための12.8%である¹⁶⁾。

11) コース別雇用管理制度

コース別雇用管理制度の有無を質問した結果日本の場合には「ある」が63.0%中国では46.5%であった。では彼女達は総合職か一般職かを質問したら日本女性の56.6%は一般職であるが中国女性の32.3%は総合職である。日本では1986年に男女雇用機会均等法が施行されたが実際には男性はほとんどが総合職であるが女性は一般職が多く、男女平等にはほど遠いのである。一方、中国では女性も約3分の1が総合職に進出しているのである。

12) 女性の配置転換

女性の事業所内配置転換があるかどうかを質問したら日本の場合には「ある」が80.2%であるが、中国の場合には41.4%が「ない」と回答している。あるのは38.1%である。では次に転居を伴う配置転換はあるかどうかを質問したら日中共に「な

い」の方が多くそれぞれ61.6%と69.0%である。では、転居を伴わない配置転換はどうか質問してみた。これは日本の場合「ある」が49.1%で、中国の場合には「ない」の方が多く45.2%である。中国では日本のように頻りに配置転換をしないようである。日本ではジェネラリストを養成するために職場遍歴をするが中国では専門家を養成するために職場遍歴は日本のようにはしないようである。

13) 女性の教育訓練

女性社員は入社してから教育訓練をどの程度受けているのであろうか。日中共に「特にない」が最も多くそれぞれ81.4%と78.2%である。しかし、全然ないというわけではなく多少は女性にも教育訓練がある。日本で最も多いのは「採用時の基礎教育」で次に多いのが「昇格時の研修」である。これらの2つの教育が主なものでその他の教育はあまり行われていない。中国では「知識技能教育」が最も多く、次が「OJT」である。「採用時の基礎教育」、「管理監督者教育」や「昇格時研修」もある。社内教育も男女雇用機会均等法では男女平等にしなければならないとうたわれているのだ

表18 女性の教育訓練(%)

	日本	中国
採用時の基礎教育	61.3	33.2
知識技能教育	22.1	49.2
配置転換教育	4.1	24.1
管理監督者教育	9.8	33.6
OJT	15.3	35.2
昇格時研修	42.6	31.4
登用時研修	7.4	23.8
特にない	81.4	78.2

(*複数回答)

16) 中国婦女社会地位調査課題組『中国の女性』監訳者山下威士、山下泰子、中国婦女出版社、1995年、pp. 108-109)。

がこの法には罰則がなく努力義務にすぎないのでなかなか遵守されていないようである。

14) 免許や資格

日中の女性達は何か資格を持っているのだろうか。もし持っているのならどんな資格を持っているのであろうか。「特に何の資格もない」女性が日中共にそれぞれ28.5%と37.4%いるが何らかの資格を持っている女性の中では日本で最も多いのは簿記検定の26.6%である。2番目が実用英語検定の21.9%で3番目は秘書検定の16.1%である。

中国の場合には最も多いのは実用英語検定と「その他」の23.8%である。「その他」の資格とは回答選択肢の中に含まれていない中国にしかないものである。日中共に「司法書士」の資格を所有している女性はいない。日本女性では税理士、通訳案内業の資格を所有している女性はいないが中国ではわずかではあるがいる。またその反対に中国の女性は所有していないが日本女性では宅地建物取引と情報処理技術者の資格を所有している女性がいる。

中国では土地や建物は取引されないのこのような仕事はないのである。しかし、中国でも最近土地を外国企業に貸し付けたり住宅を建設して

表19 免許や資格の所有状況(%)

	日本	中国
税理士	0.0	0.9
通訳案内業	0.0	1.6
実用英語検定	21.9	23.8
簿記検定	26.6	1.8
速記士検定	0.3	0.7
司法書士	0.0	0.0
宅地建物取引	0.3	0.0
情報処理技術者	2.8	0.0
司書	0.4	0.4
教諭保母	10.2	0.2
看護婦	0.1	0.9
調理師栄養士	3.2	0.2
薬剤師	3.3	0.4
ワープロ検定	14.1	1.6
秘書検定	16.1	0.7
その他	14.1	23.8
特になし	28.5	37.4

(*複数回答)

売買したりする仕事が増加してきたのでこのような資格も必要となるであろう。

15) 労働状況

企業の規模は日本の平均は約3千人であるが、中国の平均は約5千人である。中国の場合国有企業がほとんどであるので規模も大きいのである。日本の場合には中小企業が多く含まれているので平均が低いのである。週平均労働時間は中国の方が日本より2.7時間長く、残業時間も週2時間多い。1ヶ月の労働日数も3.8日長い。しかし、中国での新しい労働法によると週休2日制、週40時間労働時間が決められたので労働時間の差は今後縮小されるであろう。

表20 日中女性の労働状況

	日本	中国
従業員規模平均	2,986	5,018人
週平均労働時間	39.2	41.9時間
週平均残業時間	2.6	4.6時間
月平均勤務日数	20.7	24.5日
勤続年数平均	5.3	13.6年

16) 会社の福利厚生制度

日本で最も多い回答は「厚生年金」、「賞与」と「社会保険」である。中国では「医療保険」、「産児休暇」と「賞与」である。日本にはほとんどみられない「企業内保育所」は中国では多くみられる。賞与は日本の場合には夏と冬の年2回がほとんどであるが、中国の場合には利益がある月には毎月賞与が支給されるのである。有給休暇は日本では68.5%あり平均14.2日である。中国では47.2%あり平均10.9日である。このほかにも中国には日本にはない制度もある。例えば、親族訪問休暇およびそれに必要な旅行日数と交通費も企業が支給してくれる。中国の国有企業には比較的完全な保証制度がある。他の調査によると養老退職金は都市部の女性では82.6%があり、公費・計画医療が71.0%、病欠給与は79.9%、出産給与は85.3%が保証されている¹⁷⁾。そして実際に出産する女性の

表21 福利厚生制度の日中比較(%)

	日本	中国
厚生年金	86.2	40.9
賞与	84.6	45.9
社会保険	78.6	34.5
有給休暇	68.5	47.2
産児休暇	67.7	66.6
生理休暇	64.4	12.2
失業保険	63.8	18.5
独身寮社宅	59.0	37.9
育児休暇	49.1	31.0
医療保険	45.5	67.7
スポーツ施設	35.2	32.3
住宅ローン	31.4	5.8
保養所	29.0	23.6
文化教育	26.6	33.4
介護休暇	18.6	19.8
教育貸付ローン	14.4	29.6
苦情処理機関	12.2	33.2
再雇用制度	8.6	17.4
互助会制度	5.5	27.2
企業内保育所	0.7	34.3
学童保育	0.7	2.7
その他	0.9	2.4

(*複数回答)

85.3%が産休の給与を得ている¹⁸⁾。また、定年退職者は在職中の給与の100-50%の年金が支給され住居や生活の便宜は在職中と変わりなく継続される¹⁹⁾。養老保険と待業保険(失業保険)は強制的に加入しなければならないのである。養老保険には養老金、医療費、葬儀費用と家族への見舞金が含まれる²⁰⁾。任意加入は健康保険と安全保険である。

17) 会社選択理由

会社を選択する時の基準は日中共に類似しているようである。1番目の理由として多いのは日中共に「会社の安定性」である。日本女性はその他に「職場の雰囲気」と「仕事がおもしろい」ことを挙げているが中国の女性は「能力発揮」である。2番目の理由としても日本女性は「会社の安定性」をあげている女性が最も多いが、中国女性は「会社の将来性」である。日本女性の3番目の理由として「他に適当な会社がない」という消極的な理由をあげている。中国女性の場合には「職場の雰囲気」である。1990年の中国の調査では女性が職業選択を決定する要因の1番目は「収入が高い、待遇がよい」の38.7%で、2番目は「仕事が安定して、保証がある」の33.4%である。3番目として

表22 会社選択理由(%)

	日本			中国		
	1番	2番	3番	1番	2番	3番
会社の安定性	24.9	16.0	8.6	27.2	1.6	2.0
会社の将来性	4.8	10.0	6.6	8.9	29.4	1.8
女子採用が多い	1.2	3.9	3.2	3.6	4.7	1.3
職場の雰囲気	14.2	11.4	11.4	4.0	10.5	30.1
福利厚生制度の充実	0.4	1.6	1.9	0.7	2.2	2.7
自分の能力発揮	9.6	7.0	5.9	27.8	7.6	5.1
仕事が面白い	12.2	11.2	6.4	1.3	3.1	1.6
勤務時間日数の都合	5.3	9.8	7.4	1.6	3.6	3.8
休暇制度の充実	0.1	0.7	0.7	0.7	1.8	2.0
賃金が高い	0.5	0.8	1.1	1.3	1.8	5.3
通勤時間が短い	8.5	9.0	10.8	0.9	0.4	0.4
適当な会社がない	6.6	4.7	11.6	5.6	1.6	7.1
その他	5.2	0.8	2.8	4.0	1.6	1.8
DK	6.6	13.1	21.6	12.4	30.1	35.0
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

18) 同 p. 85。

19) 平田幹郎『最新中国データブック』古今書院、1996年、p. 217。

20) 中国経済情報センター『日系企業の中国人労務管理』pp. 164, 193。

「勤務先が便利」で28.7%である。4番目に「自己の能力の十分な活用が可能」の21.5%である²¹⁾。しかし、この調査では「賃金が高い」という理由を選択した女性は日中共にほとんどいないのはどうしてであろうか。賃金よりも会社の安定性の方が重要であるということなのでであろうか。たとえば、賃金が高くてもすぐ倒産してしまうようでは困るであろう。だが、次の働く理由では経済的な理由が一番にあげられている。

18) 働く理由

働く理由は日中共に「収入を得るため」が最も多いが中国では他に「能力を活かすため」が挙げられている。2番目の理由として日本女性は「貯蓄」を挙げているが、中国女性は「専門知識技能の発揮」を挙げている。3番目の理由として日本女性は「貯蓄」が再び最も多いが、中国女性は「社会的貢献」を挙げている。日本女性は自分のための「収入」を得てそれを「将来のため」に「貯蓄」するために働くようであるが、中国女性は自分の持っている「能力を発揮」できてももちろん「収入」も得て「社会のために」働くのである。

1990年の調査では中国女性の働く理由の1番目は「家族と自分の生活維持」のためで79.6%の女性がこの就業動機を選択している。2番目は「経

済的自立」のためで25.9%、3番目の動機は「社会に貢献したい」ための22.2%、4番目が「更にお金を儲ける」ための19.8%である²²⁾。日中共に生活のための収入を得るために働くのであるが、日本女性は自分個人の将来のために働き、中国女性は社会の貢献のために働くという意識を持っている点が違う。

19) 勤労観

では、経済的に豊かで働く必要がなければ働かないのであろうか。前述の質問では「お金のため」に働くという理由が最も多かったがこの質問の回答は「お金があっても働く」が日中共に多くそれぞれ70.7%と76.6%である。「お金があれば働かない」というのは日本人の方が中国人より多く24.7%対15.6%である。したがって、経済的な理由で働いているのだが経済的に豊かになっても働き続けるというのはなぜであろうか。やはり経済的な理由だけで働いているのではないのである。自分では働かなければ生活していけないから働いていると思っけていても働く必要がなくなっても働くのを辞めないのである。人間には無限の欲望があるので欲しい物は次から次へとでてくるだろう。今欲しい物を手に入れてもまた次に欲しい物が出てくる。このようにして人間は一生働き続け

表23 働く理由(%)

	日 本			中 国		
	1 番	2 番	3 番	1 番	2 番	3 番
収入	68.4	15.0	6.1	49.7	1.6	3.3
専門知識技能の発揮	1.7	5.3	5.3	6.0	38.3	4.2
能力適性	1.9	8.2	6.3	28.1	10.2	5.3
社会的貢献	0.9	1.6	2.4	1.8	9.4	33.0
将来のため	4.0	14.2	16.1	2.2	6.7	10.7
社会参加	8.4	13.4	12.6	2.4	5.6	9.6
家業	0.3	0.1	0.1	0.9	6.9	4.5
生計維持	9.4	13.2	8.4	4.7	7.3	9.6
貯蓄	1.2	19.7	20.9	0.2	2.2	3.6
ローン返済	0.4	2.3	4.7	0.4	0.0	0.7
その他	1.2	1.3	2.5	0.2	0.0	1.3
DK	2.2	5.7	14.6	3.4	11.8	14.2
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

21) 中国婦女社会地位調査課題組『中国の女性』監訳者山下威士、山下泰子、中国婦女出版社、1995年、p. 66。

22) 同 p. 60。

るのである。また、現代の物質的に豊かな時代には欲しい物はすべて手に入れてしまいもうこれ以上欲しい物がなくなっても働きつづけるだろう。家族のために、子供のために、夫のために働き続けるであろう。その必要がなくなっても自分自身のために、自分の自己実現のために働き続けるであろう。中国の1990年の調査では「家事労働が社会的価値を持つものとして認められることになったら仕事を辞めて家庭に戻るか」という質問に対して中国の女性達の絶対多数(67.7%)が仕事を辞めて家庭に戻ったりすることはあり得ないと考えているのである。特に都市部の女性の80%はそうのように考えており、学歴が高くなるにつれて仕事を選択する者の割合が多くなる²³⁾。

20) 就業継続意志

日中共に現在の仕事を「このまま続けたい」という回答が最も多いが57.2%対65.9%と中国女性の方が多い。日本女性は仕事や職場を変えたい、または辞めたいと考えている者が多い。現在の仕事はこのまま続けたいと思っている女性が多いがやはり日本女性にはまだ仕事は一生するものだという考えは薄いようである。結婚して家庭に入ればよいと考えている女性が多いのである。中国女性は男女平等なら女性も男性と同等に一生働くの

表24 就業継続意志

	日本	中国
このまま続けたい	57.2	65.9
仕事を変えたい	16.2	6.7
職場を変えたい	6.6	6.5
地位を変えたい	1.6	5.6
辞めたい	11.8	2.4
その他	4.5	5.1
DK	2.1	7.8
合計	100.0	100.0

が当然だと考えているのである。職場や仕事は変えたいと思っている者がいても仕事を辞めたいと思っている者はほとんどいないのである。

21) 退職理由

日本女性322人と中国人女性153人の仕事を辞めたいまたは変えたいと回答した人にその理由を質問してみた。日中共に1番目の理由は「給料が安いから」である。次に多いのが日本では「仕事面白くないから」であるが、中国では「仕事が大変だから」である。ともに仕事に関することであるが日本では仕事が大変ではなくて「面白くない」というのである。仕事が大変でも面白ければよいのであろうか。男性の補助的な仕事で簡単な作業の繰り返しの仕事では面白くないのであ

表25 退職希望理由

	日本			中国		
	1番	2番	3番	1番	2番	3番
仕事が大変だから	7.8	2.8	1.6	17.0	3.3	1.3
給料が安いから	13.0	11.8	6.2	28.8	11.8	4.6
家庭と両立できない	1.9	2.2	0.6	2.0	2.6	5.2
人間関係	5.6	2.8	4.0	4.6	11.1	5.2
結婚	2.5	0.9	1.6	0.0	0.0	0.7
出産	0.3	0.0	0.6	1.3	0.0	5.9
病人看護	0.0	0.3	0.0	0.0	0.7	0.7
育児	0.0	0.0	0.3	0.0	0.7	1.3
能力が生かせない	4.0	6.8	5.0	8.5	10.5	6.5
将来性がない	2.5	6.5	6.2	7.8	13.1	7.2
仕事面白くない	9.0	8.7	9.0	1.3	7.8	13.7
その他	5.0	2.3	3.1	0.7	1.3	2.6
DK	48.4	54.9	61.8	28.0	37.1	45.1
合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

23) 同 pp. 97-98。

う。

中国の女性は男性と同じ仕事をしているので仕事は面白いかもしれないが大変だから辞めたいと思う女性もいるだろう。2番目と3番目の理由も「給料が安い」と「仕事が面白くない」であるが、中国女性の場合には2番目の理由として「将来性がない」が挙げられ、3番目の理由として「仕事が面白くない」が挙げられている。

22) 望ましい昇級昇進の方法

女性達はどのように評価されたいと望んでいるのであろうか。日本女性の場合最も多い回答は「勤務成績中心」であるが、中国女性の場合には「勤務成績のみ」が最も多い。日本的雇用の特徴として年功序列が挙げられるがこの制度によると勤務年数が加算されると同時に給料や地位が自動的にあがっていくのである。しかし、このような制度は女性にはあまり歓迎されていないようである。女性は同じ会社に長い間勤務するわけではないのでこの制度の恩恵は享受する事ができないのである。従って、短い勤務期間で成績で評価して欲しいと希望しているのであろう。大卒ホワイトカラーも能力主義を63%が望んでいるという結果もある。その反対の年功的処遇を望んでいる者は36%である²⁴⁾。

中国の女性は勤務成績のみという者が39.4%もいる。勤務年数は全く考慮しないで成績のみで評価するのが能力主義である。よほど自分の能力に自信があるのであろう。

表26 望ましい昇級昇進の方法(%)

	日 本	中 国
勤務年数のみ	2.8	6.0
勤務年数中心で勤務成績を加味	31.1	18.9
勤務成績中心で勤務年数を加味	54.3	28.3
勤務成績のみ	6.3	39.4
DK	5.5	7.4
合 計	100.0	100.0

23) 職場選好

では、日中の女性達はどんな仕事をしたいと望んでいるのであろうか。楽な仕事が良いのかまたは仕事は大変でも権限と責任のある仕事をしたい

のであろうか。この質問に対する回答は意外なものであった。表27が示すように日本女性と中国女性是对照的な回答を選択したのである。日本女性は「権限と責任のある」仕事を過半数が希望しているが、中国女性はその反対に「楽な仕事」を過半数が選択したのである。日本女性のほとんどは事務職であり単調で何の権限も責任もない仕事をしている者が多い。そのような仕事にはやり甲斐をみだせないのもっとやり甲斐のある権限と責任のある仕事をしたいと望んでいるのであろう。一方、中国の女性は男性と対等に権限と責任のある仕事をしているがそのような仕事は大変であるのもっと楽な仕事をしたいと望んでいるのではないだろうか。両方ともないものねだりであり、現実と反対のことを希望しているのである。日本女性も希望通り権限と責任のある仕事を任せられたらもっと楽な仕事をしたいと思うようになるかもしれないし、中国の女性も単調な仕事をさせられたらもっと責任のある仕事をしたいと思うようになるかもしれない。

表27 どちらのタイプの仕事が良いか(%)

	日 本	中 国
権限と責任のある仕事	61.4	32.3
楽な仕事	29.7	59.5
DK	8.9	8.2
合 計	100.0	100.0

24) 仕事以外の上司との付き合い

上司と仕事以外のつきあいがあった方がよいかない方がよいか質問してみた。その結果は日中共に「ない方がよい」が多くそれぞれ55.7%と39.9%である。日本女性の方が多いのは日本の場合上司といえばほとんどの場合男性である。したがって、異性の上司と仕事以外の際は必要ないと考えているのである。中国の場合には上司といっても男性とは限らない。女性の上司の場合もあり得るので異性とは限らないがそれでも仕事以外の際は無い方がよいという回答が多い。労働省の調査によると「職場の人とは職場以外や休日などもつきあった方がよい」という考えに賛成なのはタイ94.7%、インドネシア89.0%に対し韓国44.2%、日本42.3%である。この場合には上司と

24) 島田晴雄他『サラリーマン破壊』中経出版、1996年、p. 54。

表28 上司との仕事以外の付き合い

	日本	中国
あった方がよい	37.5	34.1
ない方がよい	55.7	39.9
DK	6.8	26.0
合計	100.0	100.0

は限らないが職場の人間とはつきあわない方がよいという日本人の方が多いのである²⁵⁾。

(3) 家事労働の分担

家事は人間が生活していくために最小限必要なことである。人間は食べるために食品を買ってそれを料理しなければならない。もちろんすでに料理した物を買ったりレストランで食事することもできる。しかし、一般家庭では毎日の食事を家族

そろって外食で済ますことは経済的ではない。家族の団欒も持てないことになる。朝食は食べないで出かける人が多いようであるし、昼食は学校や会社で食べる人が多い。しかし、夕食はやはり家で食べる人が多いだろう。

日本ではそれを準備するのはほとんどの場合女性である。中国では女性も男性と同じように働いているので先に家に帰った方が食事の支度をし、後で帰宅した者は後片付けをするというように役割分担はしていない家庭が多いようである。食事の他にも掃除、洗濯と毎日の生活の維持に不可欠な仕事がある。これらの仕事を主婦がすれば無報酬であるが、外部に依頼したら高価なものになる。

理想的なのは男女が協力して家事をすることであるが現実には様々な原因からそれが実行されていないのである。では、日本と中国とでは家事は

表29 家事労働の分担 - 日本(%)

	自分	配偶者	親	子供	分担	その他	DK	合計
1 食事の支度	28.1	0.1	61.4	0.3	6.8	1.1	2.2	100.0
2 食後の片付け	41.8	0.8	37.6	0.5	16.4	0.9	2.0	100.0
3 掃除洗濯	35.2	0.5	46.0	0.1	14.9	1.2	2.1	100.0
4 買物	30.7	0.1	53.9	0.3	10.8	1.7	2.5	100.0
5 家計管理	25.8	0.8	62.6	0.1	2.9	1.5	6.3	100.0
6 育児	4.8	0.1	10.0	0.0	1.7	10.5	72.9	100.0
7 子供の送迎	2.9	6.5	0.1	0.0	1.5	11.7	77.3	100.0
8 子供の教育	4.4	0.5	10.0	0.0	2.0	10.4	72.7	100.0
9 学校行事への出席	6.4	0.1	9.7	0.0	0.8	10.9	72.1	100.0
10 老人や病人の介護	2.8	0.3	15.7	0.0	2.3	10.2	68.7	100.0
11 近所付き合い	10.9	1.1	46.8	0.1	5.2	3.3	32.6	100.0

表30 家事労働の分担 - 中国(%)

	自分	配偶者	親	子供	分担	その他	DK	合計
1 食事の支度	33.4	6.0	5.6	0.0	38.5	1.3	15.2	100.0
2 食後の片付け	36.5	6.7	2.9	1.8	37.4	0.4	14.3	100.0
3 掃除洗濯	38.3	3.8	2.2	0.0	40.8	0.4	14.5	100.0
4 買物	38.3	3.1	2.9	0.0	40.8	0.2	14.7	100.0
5 家計管理	31.0	5.6	4.2	0.0	42.1	0.4	16.7	100.0
6 育児	25.2	1.8	2.9	0.0	41.2	0.7	28.2	100.0
7 子供の送迎	15.6	7.3	3.3	1.1	39.9	1.3	31.5	100.0
8 子供の教育	16.9	5.3	0.9	0.2	47.7	0.7	28.3	100.0
9 学校行事への出席	21.6	6.9	0.9	0.2	40.1	0.7	29.6	100.0
10 老人や病人の介護	16.5	3.1	2.7	0.2	46.5	1.1	29.9	100.0
11 近所付き合い	21.8	4.5	4.0	0.2	26.5	1.3	41.7	100.0

25) 日本経済新聞、1996年8月15日。

どのようにされているのかを11項目について質問してみた(表29, 30を参照)。

日本女性の場合独身者が多いので家事は親、この場合母親がしている項目が多い。例えば、食事の支度と家計管理は60%以上が親である。買い物も50%以上が親である。掃除洗濯も親である。親より自分でしている場合の方が多のは食後の片付けのみである。なにもかも親にってもらっている女性が多いがせめて食後の片付けくらいは手伝っているのであろう。その後片付けさえも親がしている場合が37.6%もいる。結婚している夫婦の場合夫婦で分担している項目は食後の片付け、掃除洗濯、買い物がかろうじて10%以上を占めているがそれ以外の項目を分担している夫婦は少ない。DKが多いのは独身者の場合子供に関する項目は該当しないためである。

中国女性は結婚している場合が多いがほとんどの項目を自分でする者よりも夫婦で分担している場合の方が多い。特に分担が多いのが子供の教育、老人や病人の介護である。そのほかに40%以上分担している項目は掃除洗濯、買い物、家計管理、育児、学校行事への出席である。30%以上分担している項目は食事の支度、食後の片付け、子供の送迎である。これらの家事を自分でしている女性もいるが分担している場合の方が多い。これは日本女性と大きく違う点である。日本女性は独身者が多いが、結婚して女性が働いていても家事を配偶者と分担している場合は少ないのである。

中国でも「男は仕事、女は家庭」という考え方は根強く残っているが1990年の調査では約半数の49.68%がこの考え方に反対している。そのうち女性は51.21%で男性の48.15%より多い。中国の女性は「女性は天の半分を支える働きをしている」という考え方に64.42%が賛成をしているのである²⁶⁾。また家事の分担を決めている者が46.11%である²⁷⁾。この調査の結果と比較すると少し低いようであるが決めたことを実行するかどうかはまた別の問題である。決めてもすべての者がそれを実行するとは限らないのである。

(4) 仕事満足

満足感とは日本女性と中国女性とではどちらが高いのであろうか。満足感とは主観的なものであるから客観的な収入などの数字からは判断できない。見かけは大変裕福でさぞかし満足感も高いだろうと思っても本人は全然満足していないかもしれないし、その反対に貧困にあえいでいるような者でも満足感が高いかもしれない。ここでは本人の考えを質問している。もし本人が満足していると思えば満足、大変不満だと思っている者はそのように回答してもらっている。次の13項目の満足感と総合的判断を質問した。その結果は表31と32の通りである。

満足感が最も低いのは賃金である。これは日本も中国の女性も同じである。次に不満が高いのは福利厚生制度である。その反対に満足感が高いのは先輩同僚、家庭の理解、職場の安全衛生、上司である。中国女性の場合には賃金以外の項目に対する満足感が高い。最も高いのは家庭の理解に対する満足感である。14項目中12項目において中国女性の満足感の方が日本女性より高い。日本女性の満足感の方が高い項目は先輩・同僚との関係と家庭の理解である。先輩・同僚に対する満足感とは個人主義の中国より集団主義の和を尊ぶ日本の方が高いのかもしれない。家庭の理解はほとんど差がない。

中国の1990年の調査によると女性の仕事に対する満足度は「普通」の中位レベルが最も多いがどの項目でも不満より満足の割合の方が高い。その中でも最も満足感が高いのは「仕事の自主性」で58.7%が満足しており、次が「仕事の安定性」で52%、3番目が「仕事の報酬」で42.4%が満足している²⁸⁾。また、ある調査では外資系の企業で働いている中国人の満足感とは中国企業で働いている者よりさらに低く、仕事に「不満」と「やや不満」を合計すると87.4%で、「満足」はたったの11.7%であった。さらに給料に対する満足感も不満が圧倒的に多く67.4%を占めている²⁹⁾。

26) 中国婦女社会地位調査課題組『中国の女性』監訳者山下威士、山下泰子、中国婦女出版社、1995年、p. 29。

27) 同 p. 27。

28) 同 p. 88。

29) 中国経済情報センター『日系企業の中国人労務管理』、1993、pp. 59-60。

表31 満足感 - 日本(%)

	平均	大変 不満	不満	やや 不満	どちらで もない	やや 満足	満足	大変 満足	DK
1 賃金	2.68	18.8	26.6	27.0	14.0	5.1	3.1	0.1	5.3
2 勤務時間	3.93	3.5	11.4	21.5	29.5	12.8	14.1	2.4	4.8
3 休暇日数	3.73	4.8	14.4	26.5	20.3	15.4	12.6	1.1	4.9
4 仕事	3.89	5.2	10.2	18.9	29.4	18.1	11.4	1.2	5.6
5 教育訓練研修	3.72	4.7	7.4	16.0	50.7	8.9	4.9	0.1	7.3
6 地位処遇	3.89	4.5	6.9	13.7	49.9	10.1	9.4	0.5	5.0
7 能力評価	3.88	2.8	8.6	12.4	52.0	9.7	8.1	0.3	6.1
8 副利厚生制	3.27	11.3	17.0	23.8	27.3	7.6	6.9	0.4	5.7
9 職場の安全衛生	4.19	2.7	5.6	14.4	39.9	14.4	15.3	2.0	5.7
10 上司	4.18	4.4	8.4	12.0	34.0	15.7	17.6	2.7	5.2
11 先輩同僚	4.72	1.5	5.3	7.3	26.9	21.8	26.1	5.6	5.5
12 女子社員への理解	3.60	7.2	11.3	22.2	33.9	11.6	7.2	0.9	5.7
13 家庭の理解	4.68	1.1	2.8	6.0	40.3	13.2	22.5	6.6	7.5
14 総合的判断	3.86	2.0	10.1	22.7	31.3	20.6	6.8	0.4	6.1

表32 満足感 - 中国(%)

	平均	大変 不満	不満	やや 不満	どちらで もない	やや 満足	満足	大変 満足	DK
1 賃金	3.85	5.6	15.6	9.8	21.6	30.1	6.0	0.7	10.6
2 勤務時間	4.12	2.2	10.5	10.0	26.7	32.7	6.5	0.9	10.5
3 休暇日数	4.02	5.3	12.5	8.2	21.4	34.1	6.5	1.3	10.7
4 仕事	4.25	3.1	5.1	9.4	27.2	35.4	6.9	0.4	12.5
5 教育訓練研修	4.01	4.2	12.5	9.8	21.2	28.3	9.1	0.4	14.5
6 地位処遇	4.11	3.8	8.5	10.5	27.2	29.8	8.5	0.4	11.3
7 能力評価	4.22	1.8	7.1	8.7	31.4	28.1	8.0	0.9	14.0
8 副利厚生制	4.10	2.7	9.8	9.1	27.6	31.8	6.0	0.4	12.6
9 職場の安全衛生	4.29	4.2	5.8	7.6	24.5	34.5	9.6	1.1	12.7
10 上司	4.34	2.0	3.3	7.3	34.7	32.5	7.1	1.1	12.0
11 先輩同僚	4.63	0.9	4.0	2.9	27.4	38.5	11.8	2.2	12.3
12 女子社員への理解	4.51	1.6	3.6	6.0	29.4	34.7	9.1	3.1	12.5
13 家庭の理解	4.67	1.1	3.8	4.7	25.2	33.6	15.1	3.3	13.2
14 総合的判断	4.38	1.6	3.3	4.2	33.2	30.5	7.1	0.4	19.7

(5) 理想のライフ・コース

以上みてきたように日中女性とでは意識の上で類似点もあるが相違点の方が多い。ライフ・コースも違うであろうが理想のライフ・コースはどうかであろうか。現実のライフ・コースは違っても理想とするライフ・コースは同じ女性であるので似ているかもしれない。まず、最初に理想のライフ・コースを11の中から選択してもらった。その結果は表33の通りである。

理想のライフ・コースとして最も多いのは日本人の場合は6の出産退職して家庭に入り育児に

専念しその後再就職するというコースである。次に多いのが結婚退職して育児終了後再就職するという4のコースである。日本女性は結婚または出産時に退職して家庭に入り育児に専念してその後で再就職するというライフ・コースが理想である。この2つの合計は44.4%になる。3番目に結婚退職してそのまま家庭に入り再就職はしないという3番目のコースで16.9%を占める。

4番目に多いのは結婚後も出産後も仕事を続けるという7のコースを14.1%の女性が選択している。5番目は出産退職して家庭に入り再就職はし

表33 理想のライフ・コース(%)

	日本	中国
1 学校卒業 → 家事手伝い → 結婚 → 出産 → 家事育児に専念	1.7	2.7
2 学校卒業 → 家事手伝い → 結婚 → 出産 → 家事育児 → 新規就業	1.6	2.0
3 学校卒業 → 新規就業 → 結婚退職 → 出産 → 家事育児に専念	16.9	2.4
4 学校卒業 → 新規就業 → 結婚退職 → 出産 → 家事育児 → 再就職	18.1	2.4
5 学校卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → 出産退職 → 家事育児に専念	10.0	1.3
6 学校卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → 出産退職 → 家事育児 → 再就職	26.3	10.9
7 学校卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → 出産後も就業継続	14.1	61.5
8 学校卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → 出産しないで就業継続	1.1	3.1
9 学校卒業 → 新規就業 → 結婚しないで就業	1.6	3.8
10 学校卒業 → 新規就業	0.0	4.5
11 その他	1.1	0.7
DK	7.5	4.7
合計	100.0	100.0

ないという5番目のコースで10.0%である。3と5で合計26.9%の女性は再就職しないで家庭に留まることを理想としているのである。

中国女性の場合最も多いのは7の「出産後も継続就業」で61.5%である。次は6の「出産退職再就職」の10.9%である。残りのライフ・コースはほとんど理想ではないようである。1度も就職しないというライフ・コースはほとんどの女性は理想としていないようであるが、それでも2.7%の女性は全然就職しないコースを理想として選択している。中国の女性は結婚しても出産しても退職することなど考えていないようであるが、10.9%の女性は出産後は退職して育児に専念し、育児が終了した後再就職するというライフ・コースを理想としている。しかし、その他の女性は定年まで女性も男性と同じように働く事を理想と考えているのである。

1) 女性の職業観

ではこの質問と関連して日中の女性はどんな職業観を持っているのであろうか。日本女性は「育児のために職業を一旦中断して育児終了後に再就職する」のがよいと考えている者が最も多く44.3%を占める。次に多いのは「結婚するまで職業を持った方がよい」の16.9%である。「子供ができて職業を続けた方がよい」が「子供ができるまでは職業を持った方がよい」をわずかだが上回る。日本女性の最も多いのは「再就職型」であるが中国女性の場合には「子供ができて職業を続

表34 女性の職業観(%)

	日本	中国
女性は職業を持たない方がよい	0.7	4.2
結婚するまでは職業を持った方がよい	16.9	2.4
子供が出来るまでは職業を持った方がよい	12.8	3.8
子供が出来ても職業を続けた方がよい	13.4	60.4
育児後再就職するのがよい	44.3	22.7
その他	9.3	2.7
DK	2.6	3.8
合計	100.0	100.0

けた方がよい」で60.4%である。これは上記の理想のライフ・コースとほぼ一致している。日本女性のように結婚時か出産時に退職して育児に専念しそれが終了してから再就職するのがよいとする「再就職型」は22.7%である。この数字は上記の理想のライフ・コースの再就職型より多い。これは再就職するのがよいと思っても自分の理想のライフ・コースとしては職業継続型が選択されているのである。中国の女性は職業は一生持った方がよいと考えているが日本女性は職業よりも育児の方を優先している。優先するというよりも子供ができれば育児を誰がするかであるが、子供を預かってくれる施設があれば働き続けたいがないので否応なく職業を中断して育児に専念するしか選択肢がないのが現状であろう。

2) 希望就業継続期間

では、実際に日中の女性達はいつまで仕事を継続したいと思っているのかを質問してみた。前述

表35 希望就業継続期間

	日 本	中 国
結婚するまで	24.2	0.0
出産するまで	21.6	0.3
出産退職再就職	16.0	0.3
定年まで	14.0	78.4
よい仕事があるまで	6.0	5.7
わからない	14.2	10.8
その他	3.7	0.7
DK	0.3	3.8
合 計	100.0	100.0

の職業観と一致しているだろうか。それとも職業観と自分の希望とは違うだろうか。日本女性はやはり結婚か出産するまでが最も多くこの2つのグループを合計すると45.8%である。このうち何パーセントが再就職をするかわからないが次に多いのが出産退職再就職の16.0%である。この女性達はもうすでに再就職することを考えているのである。定年までという女性も14.0%いるがわからないという女性も14.2%いる。

中国女性の場合には定年までが圧倒的に多く78.4%を占める。次は「わからない」が10.8%で、3番目は「よい仕事があるまで」が5.7%である。結婚するまでとか出産するまでと考えている女性はほとんどいない。やはり、中国の女性は仕事は男性と同様に定年になるまで継続するものだと考えているようである。

表36 現実のライフ・コース(%)

	日 本	中 国
1 学校卒業 → 家事手伝い → 結婚 → 出産 → 家事育児に専念	0.1	3.3
2 学校卒業 → 家事手伝い → 結婚 → 出産 → 家事育児 → 就業	1.1	2.4
3 学校卒業 → 新規就業 → 結婚退職 → 出産 → 家事育児に専念	1.5	0.7
4 学校卒業 → 新規就業 → 結婚退職 → 出産 → 家事育児 → 再就職	4.7	0.7
5 学校卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → 出産退職 → 家事育児に専念	1.5	0.7
6 学校卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → 出産退職 → 家事育児 → 再就職	3.3	1.1
7 学校卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → 出産後も就業継続	4.8	68.8
8 学校卒業 → 新規就業 → 結婚後も就業 → 出産しないで就業継続	5.6	0.4
9 学校卒業 → 新規就業 → 結婚しないで就業	14.2	1.8
10 学校卒業 → 新規就業	54.1	14.0
11 その他	2.5	1.3
DK	6.6	4.8
合計	100.0	100.0

(6) 現実のライフ・コース

では次に現実のライフ・コースはどんなものであろうか。理想のライフ・コースと同じであろうか。それとも違っているのであろうか。理想のライフ・コースと同じ選択肢の中から現実のライフ・コースを選んでもらった(表36参照)。

日本人の場合若年者が多いので9と10の卒業後新規就業かしばらく結婚しないで働いているという者がほとんどで両方を合計すると68.3%を占める。この女性達は将来結婚または出産時に6割位は仕事を辞めていったん家庭に入り育児に専念する事になるだろう。

中国の場合は7の結婚後も出産後も職業を継続するというライフ・コースが68.8%を占める。これは上記の理想のライフ・コースとほぼ一致している。しかし、このコースを選択した者が理想より現実の方が多いたが理想では6の再就職を選択した者が10.9%いたが現実ではそのようなコースを取ることができなくてまたは、自分の意志で取らなくて出産後も職業を継続しているのが現実である。また、1番の1度も就職しないというコースは理想では2.7%であったが現実のライフ・コースでは3.3%に増えている。高収入の階層では働かないで主婦となる女性が出現してきているのである³⁰⁾。

30) 訂正。川久保美智子「中国女性の就業意識」関西学院大学社会学部紀要、1996年3月、no. 74 p. 108、第14は表14でその中の数字が間違っていました。正しい数字はE=0.7, F=1.1, G=68.8, H=0.4, I=1.8, J=14.0, K=1.3です。尚その上の表も第13となっていますが表13と訂正して下さい。

仕事の意味

では日中の女性にとって仕事はどんな意味を持っているのであろうか。日本女性のように仕事を一生するものだと考えていない場合と中国女性のように一生働くことを理想として実際にそうしている場合とでは仕事の意味もおのずから違ってくるであろう。日本女性にとっては仕事が「収入を得る手段にすぎない」という回答が最も多く過半数の55.5%を占めている。2番目は「家庭の次に大切」の29.8%である。仕事が「最も大切」という女性は7.3%だけである。一方、中国女性の場合に最も多い回答は「仕事は最も大切」という回答が44.8%で約半分を占めている。2番目が「収入を得る手段」の29.8%である。やはり、一生続ける仕事は女性にとっても大切なものであるはずである。日本の女性は若い者が多いがこれから仕事を一生続けようという者は少なく結婚または出産するまでの腰掛けだと考えているようである。そのような場合には仕事は最も大切なものにはなり得ないだろうが、一生仕事を継続したいと考えている女性にとってはやはり仕事は最も大切なものである。

表37 仕事の意味(%)

	日 本	中 国
最も大切	7.3	44.8
家族の次に大切	29.8	20.0
収入を得る手段	55.5	29.8
DK	7.4	5.4
合 計	100.0	100.0

(7) 3つの理想のタイプ

では次に理想のライフ・コースを3つに分類しそれぞれのコースを選択した女性達にはどんな特徴があるのかをみてみよう。日本女性の場合最も多いタイプは「再就職型」であるが中国女性の場合には最も多いのは出産後も仕事を継続する「キャリア志向型」である。「出産しないで就業継続」の3.8%と「結婚しないで就業継続」の3.1%を合計して68.4%のグループを「キャリア志向型」グループとする。日本女性の場合には「キャリア志向型」は16.8%だけである。もう一つのグループは6の「出産退職し再就職」という10.9%と4の「結婚退職し再就職」という

2.4%を合計して13.3%を「再就職型」とする。3番目のグループは1の就職しないで結婚して家庭にはいるグループの2.7%、3の結婚退職し再就職しないグループの2.4%と5の出産退職し再就職しないグループの1.3%を合計した6.4%のグループを「主婦型」とする。日本女性の場合にはこのタイプが28.6%を占める。やはり、日本女性の場合には一生働く「キャリア志向型」は少なく育児のためにいったん職業を中断して再就職するケースが多い。これは女性の希望もあるがそうせざるを得ない事情もあるのである。

中国女性の場合には出産しても仕事を継続できる環境であるので仕事を中断する必要はないのである。日本女性が仕事を継続できる環境にあつたらより多くの女性が職業を継続するだろうか。もちろん現在働きたくても働けない女性は働ける環境が整備されれば働くようになるだろう。しかし、たとえそのような環境ができて育児のために職業を中断する女性も多いものと思われる。前述の理想のライフ・コースや職業観が示すように育児のためにいったん仕事を辞めて再就職するというのが大多数の日本女性の考えなのであるから。では、3つのタイプの日中の女性の特長を比較してみよう。

まず、日本女性を年齢別にみると「再就職型」は20-29歳の女性が多い。「主婦型」は24歳未満が多く、「キャリア志向型」は35歳以上が多い。

中国女性を年齢別にみると日本と同様に「キャリア志向型」は年齢が高くなるにつれて増加している。「主婦型」と「再就職型」は25-29歳が多い。

また、日本女性の未婚者は「再就職型」か「主婦型」を理想としているが、「キャリア志向型」は既婚者が多い。中国女性は日本と反対に既婚者より未婚者の方が「キャリア志向型」を理想としている。

日本女性を学歴別にみると高卒女性は「主婦型」を理想とするが、短大卒は「再就職型」、「キャリア志向型」は大卒女性に多い。中国女性も大卒の方がそうでない女性より「キャリア志向型」を理想としている。

日本女性の何らかの資格を持っている女性は「再就職型」か「キャリア志向型」だが何の資格もない女性は「主婦型」を理想としている。中国女

表38 3つのタイプの女性(%)

	日本	中国
キャリア志向型	16.8	68.4
再就職型	44.4	13.3
主婦型	28.6	6.4

性も資格がある女性の方が「キャリア志向型」を理想としている。日本女性の「キャリア志向型」は家事を分担している者が多い。しかし、中国女性の場合にはその反対に家事を配偶者が分担してくれる家庭の女性の方が「主婦型」または「再就職型」を理想としており、家事分担が少ない女性ほど「キャリア志向型」を理想としている。

日本女性の「キャリア志向型」と「主婦型」は転職経験がない者が多いが、「再就職型」は転職経験がある者が多い。中国女性も転職経験のない者の方が「キャリア志向型」を理想としている。日本女性は大企業に勤務する女性達は「主婦型」か「キャリア志向型」が多く、「再就職型」は中小企業に勤務する女性が多い。中国女性は企業の規模が300から499人の企業で勤務している女性が「キャリア志向型」を理想としている場合が多い。

日本女性は企業内教育がない場合には「主婦型」を理想とする女性が多いが、ある場合には「再就職型」か「キャリア志向型」が多い。また、福利厚生制度が少ない企業に勤務する女性は「主婦型」を理想とするが立派な福利厚生制度がある企業に勤務する女性は「再就職型」か「キャリア志向型」を理想とする。中国女性も企業内教育もあり、福利厚生制度のよい企業に勤務している女性は「キャリア志向型」を理想としている。

また、日本女性の総合的満足感は3タイプとも「どちらともいえない」が最も多いが、「再就職型」が満足感が最も高く2番目が「キャリア志向型」で「主婦型」は最も低い。中国女性の総合的満足感は「キャリア志向型」が最も高く、「主婦型」が最も低く、「再就職型」は「どちらでもない」が過半数を占めている。日本女性にとって仕事の意味は3つのタイプに共通して「収入の手段にすぎない」というものが最も多いが、特に「主婦型」にとっては「収入の手段にすぎない」という者が最も多い。「再就職型」にとっては「仕事は家族の次に大切なもの」という者が多い。「キャリア志向

型」にとっても「仕事は家族の次に大切なもの」という者が多いが、「仕事が最も大切」という者も次に多い。中国女性にとっても「キャリア志向型」を理想とする女性にとって仕事は最も大切なものであるが、「再就職型」を理想とする女性には仕事は家族の次に大切である。「主婦型」を理想とする女性には仕事は単に収入を得る手段にすぎないのである。

いつまで働きたいかは日本女性の「主婦型」は結婚まで、「再就職型」は出産まで、「キャリア志向型」は定年まで勤務したい者が多い。また、日本女性の職業観は勤続意志と理想のライフ・コースと一致しており、「主婦型」は結婚まで働くのがよいと考え、「再就職型」は出産まで働きたい退職して再就職するのがよいと考え、「キャリア志向型」は結婚しても出産しても仕事を継続するのがよいと考えている。中国女性も「キャリア志向型」はもちろん「再就職型」も「主婦型」も定年まで働くつもりである。

日本女性は昇進基準は3タイプとも成績に勤務年数を加味した方がよいというものが最も多いが、中国女性は「キャリア志向型」の女性は勤務成績のみで昇進・昇給を決定してもらいたいと考えているが「再就職型」は成績に勤務年数も考慮してもらいたく、「主婦型」は勤務年数に成績を考慮してもらいたいと考えている。

「キャリア志向型」の女性は日中共通点が多い。例えば、高齢者、大卒、資格がある者、転職経験がない、社内教育がある企業に勤務している者、立派な福利厚生制度がある、仕事が最も重要である、定年まで仕事を継続するつもりであるなどが共通している。反対に違う点は日本では既婚者に「キャリア志向型」が多いのに、中国では未婚者に多い。また日本の女性は昇進・昇給を成績と勤務年数を考慮して欲しいと思っているが、中国女性の「キャリア志向型」は成績のみを考慮して欲しいと思っている。日本の場合には家事を分担している女性に「キャリア志向型」が多いのであるが、中国の場合にはその反対に家事分担が少ない女性が「キャリア志向型」を理想としているのである。また、満足感も中国では「キャリア志向型」が最も高いが、日本では「再就職型」が1番高く「キャリア志向型」は2番目に高いのである。これは理

想のライフ・コースが日本女性と中国女性とでは違うためである。日本女性の理想のライフ・コースは「再就職型」なのでそのタイプの女性の満足感が最も高いのであるが、中国女性の理想のタイプは「キャリア志向型」なのでそのタイプの女性の満足感が最も高いのである。

以上日中の働く女性の比較を5つの分野でしてきたがやはり、推測通り類似点より相違点の方が多かった。では類似点とは何だったのかまた、相違点とは何だったのかを整理してみよう。

4 まとめ

日中女性の共通点

まず、日中女性共入社してからの教育訓練はほとんどないことである。また、女性達の資格では日中共に英語検定が最も多い。やはり国際化時代を反映して世界中で通じる英語を勉強している者が多いということである。それから会社の選択理由が日中の女性に共通で会社の安定性である。これは男性にとっても女性にとっても会社を選択する場合には最も重要な要素であろう。女性達が働く理由も同じで収入を得るためである。しかし、日中の女性は経済的に豊かになっても働くことは辞めないといほとんどの者が回答している。辞めたいという女性は日本にはいるが中国にはわずかである。それから上司との仕事以外の交際はない方がよいと日中の女性達は考えているのである。以上が日中女性の少ない共通点である。

日中女性の相違点

1. 個人属性

では次に相違点についてみてみよう。こちらの方はたくさんある。まず、サンプルから違う。日本女性の方が平均年齢が中国女性より10歳近く若いのでほとんどの女性は未婚で両親と兄弟姉妹と持ち家に住んでいる。結婚して子供がいる女性は親が子供の面倒をみているか保育園に預けている。学歴は高卒が最も多く次が短大か4年生大卒である。

一方、中国女性はほとんどが結婚しており配偶者と子供1人と会社から支給された家に住んでいる。子供がいる女性は会社内の保育所に預けて働

いている。学歴は4年生大卒が最も多く次が高校卒、短大卒である。以上がサンプルの違いである。

2. 仕事の内容

次に仕事の内容に関しての違いは日本女性の職種はほとんどが事務職であるのに対して、中国女性の場合には専門技術職かサービス業が多いということである。また、業種も日本女性は製造業が最も多いが中国女性の場合にはサービス業か公務である。日本女性には管理職に就いている者が5.9%だけであるが、中国女性の場合には23.8%である。約4人に1人は管理職である。日本の企業には女性の管理職がないという回答が62.4%で過半数を占めるが、中国ではその反対に女性の管理職がいるという回答が87.5%である。しかし、女性も管理職になることができるという回答は日中共に多いのであるが、日本の場合には55.2%で中国の場合には86%である。

将来管理職になりたいと思っている女性は日中共に少ないのであるが日本女性より中国女性の方が管理職になりたいという希望を持っている者が多い。日本ではたとえなりたいたいと思ってもその希望がなかなかかなえられないが、中国の企業では女性も努力すれば管理職になれる可能性が高いのである。日中女性共転職経験はない者が多いが中国女性の方が日本女性より転職経験者が多い。退職の理由は日本では結婚や病人介護の個人的な理由が多く、また、職場の雰囲気も大きな原因である。中国では家事と仕事との両立が困難な場合にそれを解消するために転職する機会が多い。また、能力を発揮できる職業に転職をする女性も多い。コース別管理制度は日中共にある方が多いが、日本女性の場合にはほとんどが一般職で総合職はたったの8.5%しかいないが、中国女性の場合には総合職が3分の1である。職場内の配置転換は日本の方が多く8割があるが中国の場合にはない方が多い。しかし、転居を伴う配置転換は日本でも中国でもない方が多い。転居を伴わない配置転換は日本の場合にはある方が多いが中国の場合にはない方が多い。

労働時間、残業時間、1ヵ月の労働日数は日本より中国の方が多。しかし、現在の仕事を継続したいと考えている女性は日本より中国の方が多

い。日本女性は結婚又は、出産するまで仕事を継続したいと思っている女性が多いが、中国女性は定年まで仕事を継続したいとほとんどの女性が思っているのである。

また、昇進・昇給は中国の女性は勤務成績のみで評価されたいと考えているが、日本の女性は勤務成績だけでなく勤務年数も考慮して評価して欲しいと考えている。

3. 家事の分担

日本では独身女性はほとんどの家事を母親にしてもらっている。結婚している場合には女性がほとんどをしており、配偶者と分担している場合は少ない。一方、中国では既婚者が多く夫婦で分担している場合の方が女性がするより多いのである。

4. 満足感

中国女性の方が日本女性より満足感が高いのである。14項目中12項目において中国女性の満足感の方が日本女性より高い。日本女性の満足感の方が高い項目は先輩・同僚との関係と家庭の理解である。しかし、その差はほんのわずかであり統計的に有意ではない。

5. ライフ・コース

日本女性の理想のライフ・コースは結婚か出産時に退職して育児に専念し育児が一段落してから再就職するというものである。しかし、中国女性の理想のライフ・コースは結婚しても出産しても仕事は継続するというものである。

現実のライフ・コースも理想とほぼ同じである。中国女性の場合には再就職を理想としている者が少しはいるが現実のライフ・コースにはいない。職業観も同様に中国女性は定年まで働くのがよいと考えているが、日本の女性は育児のためにいったん職業を中断して再就職するのがよいと考えている者が多い。

以上のように類似点より相違点の方が多いためである。

A Comparative Study of Japanese and Chinese Female Employee Attitudes

ABSTRACT

This article reports the results of a research comparing Japanese and Chinese female employee attitudes. The comparison focuses on 5 dimensions:

1) employment conditions, 2) employee attitudes, 3) household sharing, 4) level of satisfaction, and 5) ideal and real life-courses.

752 Japanese and 449 Chinese working women participated in this research. More differences than similarities are found and the greatest difference is that Chinese women work until retirement age while Japanese women work until marriage or childbirth.

Key Words : Working attitudes, Female employee, Japanese and Chinese comparison